

## FD 関連研修会 参加報告書

主 催	立命館大学 教育開発推進機構
企画名称・テーマ	第3回教学実践フォーラム 教学 IR 国際セミナー 「大学における根拠に基づく教学改善と IR」
開催日時<会場>	2012年1月27日(金) <立命館大学朱雀キャンパス>
参加者所属	教学部 教育開発課

### 参加報告

2012年1月27日(金)に開催された、「2011年度第3回教学実践フォーラム 教学 IR セミナー『大学における根拠に基づく教学改善と IR』」に参加した。

まず、立命館大学 教育開発推進機構の鳥居朋子氏より IR をめぐる諸課題の整理がおこなわれた。

大学教育の質保証に向けた「学習成果の可視化/Learning Outcomes」が求められる中、IRは有効な手段である。しかし、国内に眼を向けてみると有機的に機能している大学は少ない。それは「IR機能が学内に分散し、組織化されていない傾向にある」事が一番の理由だと指摘された。

IRは情報収集、情報分析、政策提言、政策実行のフェーズを展開していく事であるが、その時に重要な事は、組織の文脈に即した「課題」に照らし合わせながら進めていくこと、また、IR室と関係部局との連携が求められる事が重要であるとの発言があった。

次に、米国・カリフォルニア州立大学ロングビーチ校(以下、CSULB) 戦略的計画担当副学長のデイビット・ドゥエル氏より IR の先行事例発表がおこなわれた。

アメリカでは現在大学卒業の割合が韓国、諸外国に比して低迷しており、国全体として非常に危機感を募らせている。

そのような状況の中で CSULB でも門戸を広く開放し多くの学生の受け入れに力を注いでいる。そのような大学進学への機会の拡大は多様な学生を受け入れる事を意味し、その多様な学生に対し一定の学習成果を保障することが非常に難しくなっている。

そこで CSULB では IR 室が中心となり、関係者なら誰でも閲覧できる IR システムを構築し常に質保証に向けた取り組みをおこなっている。

デイビット・ドゥエル氏は IR について、「CSULB では IR を確立するのに 15 年の時間を有した。大学の文化に IR が馴染むには多くの時間がかかる」と述べ、「専門的知識が無くても誰もが見て参考に出来る IR システムを構築する事が重要だ。」と指摘された。

豪州・バララット大学 学習・質保証担当副学長 トッド・ウォーカー氏より報告がなされた。

オーストラリアもアメリカと同じく、大学への進学機会を広く設け自由解放している。また、オーストラリアは地元の大学に進学する学生が多い事から、学力も多様で入学への意識においても希薄な学生が少なくない。

そのような状況の中、バララット大学は常に“教育の質”についてチェックをおこない、大学教育での学習成果が低下しないよう努力している。

カリキュラムやプログラムをチェックする中で、学生が集まらないプログラムや成果が出ないカリキュラムについてはその専攻とデータを基に話し合いをおこない、継続、縮小、廃止等を決定している。

今回、この研修に参加して強く感じたことがふたつある。一つ目は、IRは誰もが気軽に使える身近な環境に無いと浸透しないということ。そしてもうひとつは、IRは分析された情報をもとに部局と部局が会話をすることである。

本学においてもIRの必要性が叫ばれているが、まずはIRに触れデータを基に会話を重ねる文化の醸成が必要だと考える。

今回の分科会の議論では、まず解決策として「授業方法の見直し」があげられた。90分を講義だけで終らず、グループワークやディスカッションなど学生も参加する授業に変えることが効果的だとの結論に至った。

また、講義を受ける際、授業中の私語も沈黙も「学生自らの成長を阻害している要因」であることを、大学が学生に伝達し理解させないと、根本的解決にはならないだろう。